Series 11
オーディオ
つれづれの記

オーディオと映画に魅せられて

和島繁利
2017年4月入会

私が本格的にオーディオと映画に魅せられたのは、平成元年に自宅を新築し、その際に居間と食堂を一緒にして20畳のスペースを確保してからです。
新築する前は住宅展示場を家族と一緒に毎週のように半年以上も巡り歩き、「広いスペースを確保しておけば子供はのびのびと遊び回り、狭い場所で生活するよりも広い空間認識を持つことで自由な発想を持てるような意識が育ってくれればいい」と考え、「必要なら後で仕切ればいいのだから」と思い、義父から紹介の地元建設会社の設計士さんと相談し、施工も急ぐこと無くじっくりと半年掛けて建設して貰いました。

それまでもオーディオの方は、「2トラ38」のオープンデッキやナカミチカセットデッキ等で相当オーディオにも熱を上げていましたし、映画もビデオテープが出ていたので、レンタルビデオ （VHS方式)より性能が良かったソニー(β方式)にコピーして200本以上はあったと記憶しています。
それが、レーザーディスクが発売されてからはビデオテープと比較すると音と映像が格段に違うことが判り、何よりもテープのカビの心配がいらないことで少しずつ LD に切り替え、時間は掛かりましたが「ヒモ」から「お皿(ディスク)」に完全に移行してしまいました。

自宅新築当初は映像は50インチのリアプロジェクターで、音は従来からの2組のスピーカーを重ねて、プロジェクターの前に椅子をセッティングして始めたものでした。
数年後には中古のパイオニア製 TAD の小口径ユニットを使った エクスクルーシブ2252を、低音部が弱いためにヤマハ SW1000 も導入し、アンプはサラウンド仕様を導入しました。
また、プロジェクターも運良く中古の3管に当たり、同時に100インチの電動スクリーンも中古で入手しました。

その後、アンプはセパレートとなり、LD も DVD から現在は BD(ブルーレイディスク)、プロジェクターは液晶、スクリーンは画面を広くするためにサウンドスクリーン(120インチ)にしました。
スピーカーは一時 JBL の大型 SP の SPL2001 も使いましたが、憧れはパイオニア製 TAD ユニットを使用しているホーン型のエクスクルーシブ2401でした。
しかし高額なため諦めかけて居た時、秋葉原のダイナミックオーディオ中古部門から連絡があり、ソニー製の大型プロ用モニター(ホーン型)スピーカーセット(5.1 チャンネル分)の導入となりました。

大型プロ用モニタースピーカー(4 インチドライバー＋ウーファー38cm×2)はその大きさのせいか、従前からのヤマハ MX-1 の駆動力では当初は上手く鳴らなかったのですが時間が経つにつれて少しずつ良く鳴るようになりました(^.^)
数年前には思い切ってパワーアンプを TAD M2500×2 台を使いマルチチャンネルで駆動するようにしてからは、後から導入したスーパーウーファー(46cm)とともに見違えるような高音質、ド迫力を奏でるようになり、高精細、高画質な映像と相まって 4Kや 8Kはまだですが、

それでもハイレベルなホームシアターへと変貌しています。

映画との出会いは中学生の時でした。青森・津軽の片田舎でも小さな映画館が我が家の近くにあり、仲間と良く通ったものでした。
そこで見た「妖星ゴラス」という SF もので、重量級の巨大な彗星が地球と衝突するのを避けるため南極に巨大な円形のエンジンを作り、地球を軌道から動かして人類を救おう、という内容でしたが、ミニチュアを使った特撮の大画面と大音響の音楽や効果音に大感激！　それ以来 SF の大ファンとなり、今でも SF は大好きです！(^.^)
やがて上京し、東京の、今は無い「シネラマ東京」で見た「2001 年宇宙の旅」には、その圧倒的な大画面、立体感＆画面への没入感、そして大音響、現実と見まごうばかりのハイレベルな数々のアイテム、ストーリーの複雑さ等々、どれを取っても経験未熟な若者が大感動に誘い込まれるのには充分過ぎました。
その後、リバイバル上映で見た歴史大作の「ベン・ハー」、「風とともに去りぬ」、「十戒」等を始め、「ウエストサイドストーリー」のミュージカルや「007」のサスペンス＆冒険物、未解決ながらも国際的事件で有名な「JFK」(ケネディ大統領暗殺事件)、東西冷戦時代のキューバ危機を描いた「13 デイズ」等々、様々な映画を見るにつれて映画の素晴らしさにますますのめり込むようになっていきます。

世の中の技術発達とともに映画関係にも技術革新の波が押し寄せ、それまでは主にモノラル音声だった映画館も 70 年代後半の「スターウォーズ」からは「Dolby システム」のサラウンド音響が主流となり、大画面と共に大迫力のある映画が味わえるようになって来ました。

プロジェクター

これ以降、デジタル化が進んで音声だけで無く映像にも及び、従来は大規模なロケで撮影してたものがCGでも作成可能となり、特撮(特殊撮影)でも自由に空や宇宙を飛び回って無重力シーンや、挙げ句は水や火までもが自由にコントロール出来るようになったことで、従来では不可能だったシーンが可能となっています。
一方、デジタル化による圧縮技術の進歩で家庭でも簡単にDVDで、特にBD(ブルーレィディスク)を使用し、AV アンプのサラウンド回路を使用することにより、高精細、高画質、高音質で映画館顔負けの大迫力で映画や、音楽等の各種コンサート等でも会場そのものの雰囲気再現が可能となったことで、大迫力で動画を楽しむことが可能となりました。お陰で、一度でもそれを体験するとその魅力に取り憑かれて一時は我が家のようなホームシアターのファンが沢山居て、お台場等各種イベント施設では相当な入場者に溢れていました。

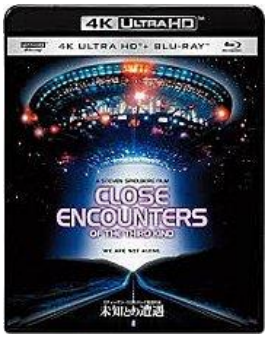
我が家では、オカルトを除くSF、サスペンス、歴史大作、戦争、恋愛、実録(裁判等)、災害、アニメ等様々な映画を始め、音楽物の各種ステージやコンサート、紀行もの、ドキュメンタリー、科学や歴史的な企画物(NHK特集等)等々、様々な動画を 120 インチスクリーンと大迫力のスピーカーで楽しんでいます。

居間 兼 シアタールーム

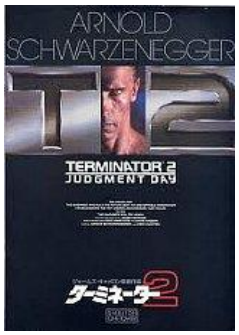
映画は特に思い入れがあり、ジャンルもオカルト以外は出来るだけ幅広く見てきましたが、やはり、良い映画は監督が良い作曲家とコンビを組んでいる場合が数多く見受けられます。
映画は様々なシーンで色々な音楽が効果的に使われてハラハラドキドキしたり、ハッピーになった

りと、その場面とそこに使われてる音楽がピタッとハーモニーが合った時は「あっ！」と思わず身体が画面に引き込まれてしまい、気がついた時は身体中にズッシーンと痺れにも似た大感動と共に電気が走り、身体が硬直してしまいます。

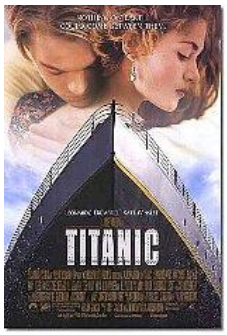
今まで覚えている数多い中でも思い出深いシーンを 2、3 上げるとすれば



「未知との遭遇」
スピルバーグ監督
UFO 母船の登場シーンで、
音楽はジョン・ウィリアムズ。



「ターミーネーター2」
ジェームズ・キャメロン監督
最後のシーンで、
音楽はジェームズ・ホーナー。



「タイタニック」
ジェームズ・キャメロン監督
最後でセリーヌディオンが歌う
主題歌が流れ出したシーン。
音楽はジェームズ・ホーナー。

また、映画音楽の作曲者で言えば、アラン・シルベストリ（バック・トゥ・ザ・フューチャー等）、ハンス・ジンマー（パイレーツ・オブ・カリビアン等）、ジェイムズ・ニュートン・ハワード（バーティカル・リミット等）、ジェリー・ゴールド・スミス（パピヨン等）等々色々あります。
また、映画では、今まで知らなかった知識も様々入手でき、宇宙の生い立ち、物理、医療、歴史、音楽、ファッション、料理、環境、動植物、地球、等様々あります。

最近の映画を含めた動画（コマーシャル動画も含む）は、良く計算されて作り込まれており、特に大画面で見ると、音響のサラウンド効果と相まって実体験でも経験したような感覚に捕らわれます。音楽物の各種ステージやコンサートでもそうで、居ながらにして最上の席に居るような感覚で味わう事が出来ます。

会員の皆さんは既に立派なオーディオをお持ちでしょうから、まずはサラウンド回路がある手頃な AV アンプの入手をお勧めします。体験も秋葉原、新宿の専門店で可能ですから、是非、体験されることをお勧めします。